



地域をうつす 学校資料

奥州市文化財調査速報展 2024

解説書

えさし郷土文化館

2024年7月13日(土)～8月4日(日)

奥州市衣川総合支所

2024年9月2日(月)～9月20日(金)

胆沢郷土資料館

2024年10月5日(土)～11月6日(水)

奥州市牛の博物館

2024年11月6日(土)～12月22日(日)

奥州市埋蔵文化財調査センター

2025年1月16日(木)～2月3日(月)

ごあいさつ

奥州市教育委員会では郷土の歴史文化を広く周知することを目的に、奥州市埋蔵文化財調査センター、えさし郷土文化館、奥州市牛の博物館、胆沢郷土資料館、衣川総合支所を会場に巡回展を開催しています。

昨年度までは「発掘された奥州市展」と称し、遺跡から出土した資料を中心に展示を行ってまいりましたが、時代を追って構成していた展示が江戸時代まで到達し、一区切りついたこと、また、奥州市では遺跡以外にも文化財に関する調査を行っていることから、今年度は「学校資料調査」をテーマにした展示となっております。

奥州市の小学校では令和4年度に江刺地域の7校、令和5年度に水沢地域1校と胆沢地域1校が閉校しました。教育委員会では、学校に残された歴史的資料の収集と記録保存に努めております。

昨年度は、金沢大学学術メディア創成センターの高田良宏准教授と合同会社 AMANE のご協力を得て、江刺地域の7校を対象に調査を実施し、えさし郷土文化館での企画展「学校のおもかげ」をはじめ、デジタルアーカイブでの公開も試みました。今年度も、新たに閉校した学校へも対象を広げ、引き続き調査を実施しています。

ぜひ、多くの市民の皆様に、学校資料の魅力に触れていただければ幸いです。

令和6年7月

奥州市教育委員会

教育長 高橋 勝

凡例

- 1 本書は、令和6年7月13日（土）から令和7年2月3日（月）まで、奥州市内の5施設において開催する巡回展「奥州市文化財調査速報展 2024 地域をうつす学校資料」の解説書である。
- 2 本書での資料掲載順は、展示順序と一致するものではない。
- 3 展示会場の規模等の事情あるいはその他都合により、本書掲載の資料が展示されない場合がある。また、説明の必要上、参考として展示品以外の資料画像も掲載されている。それらには【参考】と付している。
- 4 本書の執筆は野坂晃平（えさし郷土文化館）、遠藤栄一（奥州市埋蔵文化財調査センター）、森本陽（奥州市牛の博物館）、及川真紀（奥州市教育委員会歴史遺産課）、朴沢志津江（同）、中島康佑（同）、高橋和孝（同）、羽柴南枝（同）が本論とコラム、「最新の発掘調査成果」「奥州市資料調査速報」を担当し、このうち「作屋敷遺跡」を北田勤氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、「中林下遺跡」を村田淳氏（同）に寄稿頂き、「資料整理からデジタルアーカイブ公開までの手順」を佐々木紫帆氏（合同会社 AMANE）より提供頂いた。
- 5 本書は奥州市教育委員会歴史遺産課が作成し、えさし郷土文化館、一般財団法人奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センターが編集した。

学校は地域の箱舟^{はこぶね}

学校は教育の提供の場であることはもちろん、児童・生徒だけではなく、保護者や教職員、地域住民による交流の場として社会的な結びつきを推進する機能があり、今日まで地域コミュニティにおける重要な役割を果たしてきました。また、教育プログラムに地域史や民俗芸能等を取り入れることで地域文化の特色を学び、人材の育成や地域行事の参画を通じた社会活動へも深く関与し、まさに学校は地域に不可欠な存在として、その発展に大きく貢献してきました。

こうした役割を担ってきた学校だからこそ、多様なモノが保管されています。それらは意識的に残されたものもあれば、何となく残っているものなど様々ですが、いずれも学校の歴史や社会の営みを物語る資料といえるものです。

学校運営の原簿となる公文書類や古い写真、児童・生徒の活動の痕跡が感じられる作品、地域の方々から寄せられた土器や石器の埋蔵文化財から絵画や揮毫額^{きごう}の美術品に至るまで、学校にはその開校以来、多種多様な資料群が蓄積されています。とりわけ地域の歴史・文化・地理・自然などに関する豊富な資料が顕著な点は、地方に博物館などの社会教育施設が設置される以前から学校や教職員がその担い手としての役割を果たしていたことを示唆しており、まさに学校は教育史のみならず地域史そのものを現代へと伝える方舟ともいえる存在です。

こうした「学校資料」は今後の教育活動や地域史研究の原資料として幅広い利活用が期待されます。デジタルアーカイブ技術による学術分野への情報発信をはじめ、実物資料の公開を通じた地域と学校、そして博物館施設を結ぶ新たな交流プラットフォームの構築など、地域の未来を考える上で「学校資料」は大きな意義があるものと考えられます。

学校資料の価値

	資料価値	概 要
1	学校史的価値	学校の年史、特色、その移り変わりなどがわかる。
2	教材的価値	現在の授業や学校活動での教材として利用できる。
3	教育学的価値	教育の変遷や今の教育のあり方を考えられる。
4	部活動的価値	地歴部などの部活動をおこなうためのきっかけ・資源となる。
5	地域史的価値	地域の姿や記憶を物語る。
6	学術的価値	人類の歴史を研究する考古学・歴史学・民俗学など学問の素材、研究材料となる。
7	学問史的価値	考古学や科学などの学問の歴史がわかる。
8	産業史的価値	教材作成などに携わった産業界のことがわかる。
9	象徴的価値	卒業生や教員、地域住民などの思いやアイデンティティ、記憶の拠所、シンボルとなる。
10	社会的関係価値	資料の調査が資料に関わる人々を連帯し関係構築をうながす。
11	アートな価値	学校の美的景観づくりや現在のアートの素材となる。
12	ほかにも…	

学校資料の魅力

「学校資料」を定義する場合、それは「学校に関わるあらゆるモノやコト」を指します。

それは学校の内外に存在し、有形・無形・動産・不動産を問わず、景観そのものも含まれるとされています。すなわち、学校特有の行事や音楽、あるいは学校の教育方針や教員の指導方法もそれに該当します。時代も古いものから現在に至るまで、学校生活で生成されているものの全てがその定義に含まれます。

また、学校資料は一個人の価値観や視点に委ねられるものではなく、多様な人々の多角的な観点によって資料価値が明確となります。それは「学校」という現代社会を形成してきた場所によって生成された資料であるからこそ、その価値には多様な意義が潜在しているからです。

卒業生に著名なスポーツ選手や芸術家などがいる場合、校内にゆかりの品々や作品、活躍の様子などを周知する掲示を行うギャラリーが設けられる例が多くみられます。これは特段、現代に始まった風潮ではなく、地域出身の政治家などによる揮毫額が校内に飾られるなど、古くから地域の先人の事績に学ぶという教育が定着していることに裏付けられたものとも推察されます。

さらに、学校特有の行事として「開校 150 周年」などの周年事業などが挙げられます。各校とも特色のある記念行事が実施されますが、往々にして「記念誌」の制作がその事業内容に含まれることがほとんどです。そのため、学校では開校時からの沿革誌や写真などの古記録が大切に保管される傾向が極めて強く、公文書類の保管年限を経過してもなお、「永年保存」の文言が付された資料群が数多く蓄積され、重厚感のある歴史が留められています。



藤里尋常小学校

学校資料の意義

明治時代に近代学校制度が確立されてからほどなくして、学校は博物館的機能を有するようになります。大正6年(1917)の文部省による全国調査では、当時の博物館数が128館あり、そのうちの50館が学校内に所在する博物館(学校博物館)で、全体の約4割にも達しています。特に地方においては博物館の数は極めて少なく、学校設立の周年事業などの一環として、地域住民や卒業生が地域学習のために寄贈した資料を教職員が主体となって保存・展示する取り組みが進められました。その結果、学校は地域にとって文化的資源の集積場所として認識されるようになり、その傾向は現在でもみられます。

大正時代から昭和初期には郷土学習が盛んに行われました。その背景には経済恐慌などの影響による不況があり、その復興のために郷土について学ぶことで地域課題を把握し、その解決策を見出そうという目的もありました。ここでもその主体となったのは学校や教職員で、地域の調査・研究を実施し、郷土誌などの地誌編纂にも積極的に力を注ぎました。とりわけ昭和15年(1940)には「紀元二千六百年記念」(神武天皇が即位してから2600年にあたる年)事業の一環として、岩手県下の各郡村では学校が中心となって『郷土教育資料』の編纂が取り組まれました。これらは、戦後の自治体史(市町村史)や郷土誌の底本として広く活用されることとなり、現在でも高い資料価値があります。

学校が収集したものは決して高価な美術品ではなく、地域住民や卒業生が持ち寄った身近な自然の産物や文書類、書画などの作品といった地域資料が中心です。あるいは、かつて使用されていた机やイス、オルガンなどの学校備品が現在まで残り、文化財的価値を帯びているものも多数あります。それに加えて大事にされてきたのが、児童・生徒の制作物や民俗芸能などの地域文化です。こうしたところにこそ、「学校資料」は単に教育的価値や歴史資料的価値に留まるのみならず、広く文化遺産としての性質が内包されているのです。



ひとかべ
人首小学校

[学校の歴史]

近代教育の^{ほ う が}萌芽

現行の学校制度は、昭和 22 年（1947）に「教育基本法」と共に制定された学校教育法に基づいたものですが、日本最初の近代学校制度は明治 5 年（1872）に公布され、翌 6 年から施行された欧米諸国を模範とする「学制」として定められました。この学制施行から数えて 2023 年には各地の小学校で創立 150 周年記念事業などが実施されましたが、当時の学校制度は大学・中学・小学の三段階を定めたもので、初等教育における就学年限は下等小学 4 年、上等小学 4 年の計 8 年でした。また、国民に教育の機会が開かれたものの、授業料や学校建設・維持費などは教育を受ける国民が負担しなければならなかったため、しばらくは児童の就学率は低く、学校も政府の求める水準にはなかなか達しませんでした。

明治 12 年（1879）の胆江地方（奥州・金ヶ崎地域）の『学事状況概略』によると、学校数は 65 校あり、その内、新築校は 20 校、分校 23 校で学制施行当初（明治 6）に本校機能を持つ学校はおよそ 22 校が設置されていました。また、同概略記載の就学児童数は 4,426 人を数え、「上等小学に通う者は少ない」とあります。これは小学校が設立されて年数が浅いことや、下等小学を終えると退学して職に就く者、あるいは漢学を修めるために個別に師範（私塾）について『日本外史』『国史略』『四書五経』の類を習う者があったためとの理由が述べられています。学制が施行されても当時の地域実態としては最低限の素養を身に付けたら早々に家業に従事したり、前近代から続く師弟関係に基づいた教育習慣が踏襲されていたことをうかがわせます。

学校系統図（学制による制度）

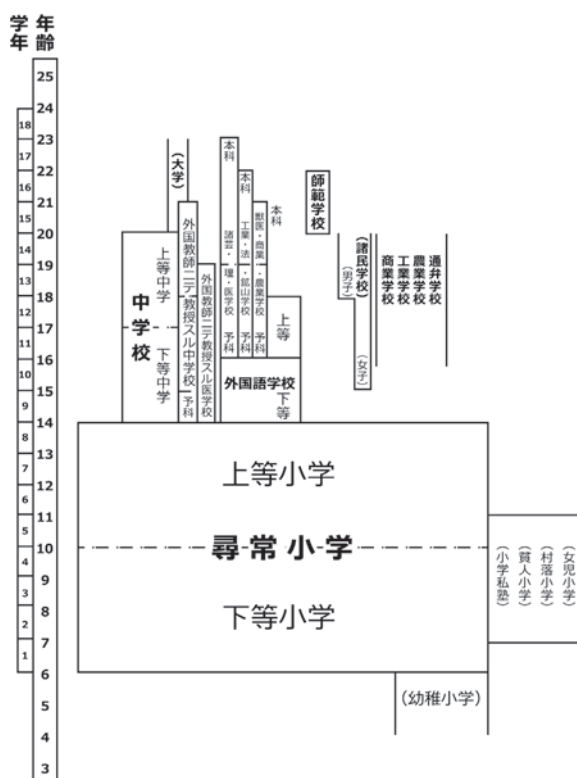


図 1 明治 6 年

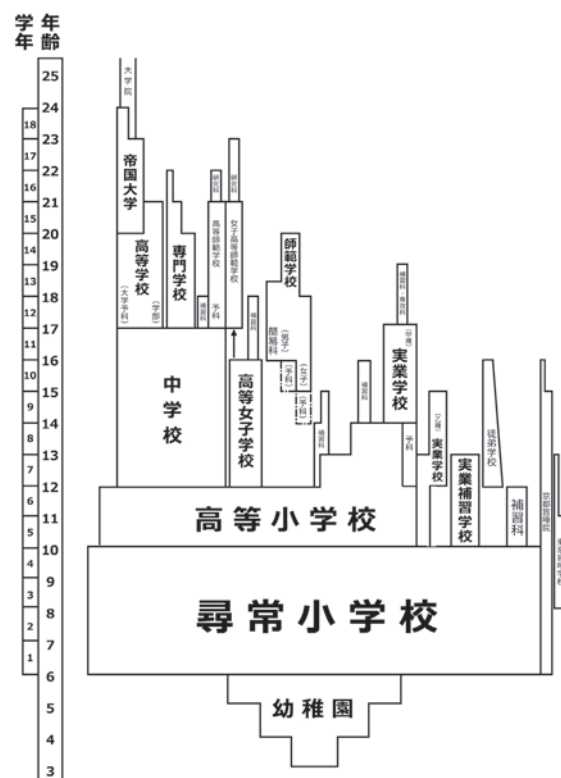


図 2 明治 33 年

〔学校の歴史〕

教育制度の黎明

政府は教育制度の定着を図るため、新たな教育令や校種別の学校令の制定と改廃、教育勅語の発布、実業学校の制度化、小学校の授業料無償化などの試行錯誤を重ね、明治35年（1902）以降となって全国的な就学率は90%を上回るようになりました。なお、「教育の義務」は明治19年（1886）の「小学校令」によって初めて定められますが、各地の帝国大学や高等師範学校の設立、国定教科書が整うなど、学制公布から約40年の歳月を経てようやく近代学校制度の基本的な骨格が整備されたといえます。

この時、小学校は尋常小学校と高等小学校とに分けられ、明治20年（1887）、胆江地方には胆沢郡立高等小学校が水沢に、江刺郡立高等小学校が岩谷堂に設置されました。就学年限は尋常・高等ともそれぞれ4年と定め、尋常小学校の4年間のみを義務教育期間と規定、明治40年（1907）には尋常小学校の就学年限の延長に伴い6年に改定されました。これにより、尋常小学校卒業後は高等小学校（2年制）、中学校（5年制）、高等女学校（4年制）、実業学校（3年制）などの進路がありましたが、高等小学校へ進学するか、あるいは尋常小学校を出て就職する児童がほとんどでした。ちなみに、この時点で日本の「大学」は東京帝国大学（現 東京大学）、京都帝国大学（現 京都大学）、東北帝国大学（現 東北大学）の3つしかなく、大学進学を目指す場合、受験により中学校に入るのが最初の関門でした。しかし、胆江地方に中学校はなく、岩手県内でも盛岡中学（盛岡市）、一関中学（一関市）、福岡中学（二戸市）、遠野中学（遠野市）のみで、いずれも県立学校でしたが5年制で学費もかかりました。この中学校を卒業すると、熾烈な入試を経て高等学校に入学することができましたが、岩手に高等学校はなく、東北地方でも明治時代に存在したのは仙台の第二高等学校のみです（大正時代に弘前と山形にも設立）。高等学校の卒業者は、帝国大学のいずれかに優先的に進学することができたので、当時の高校は帝大の教養課程に近い存在だったといえますが、明治末期の大学進学率は2%程度でした。



藤里高等小学校

〔学校の歴史〕

学校の定着と発展

大正時代には、第一次世界大戦後の世界的な自由教育運動に呼応する形で、内閣直属の諮問機関として「臨時教育会議」が設置されました。この頃には尋常小学校の就学率は97%に達し、高等小学校にも多くの生徒が進学するようになっていました。国民の進学意欲の高まりを捉えた政府は、高等女学校や実業学校をはじめ多様な校種の拡充を図り、また、大学の学部制への移行、単科大学の創設などの制度改革も実施しました。私塾や専門学校を前身とする私立大学の設立も認可され、大正9年（1920）には慶應義塾大学、早稲田大学、明治大学、中央大学、法政大学、日本大学、同志社大学、國學院大學が誕生しました。しかし、進学率が上昇したとはいえ、尋常小学校卒業後の進路は高等小学校や中学校などが並列する複線型の教育制度が敷かれており、高等学校や大学、師範学校の上級学校にまで進学することができたのは、同年代のごく一部に限られていました。

その一方で、現在の奥州市に所在する水沢高等学校、岩谷堂高等学校、前沢高等学校、私立水沢第一高等学校はいずれも明治末から大正期に設立された「高等女学校」を前身としており、水沢農業高等学校は明治36年（1903）に郡立胆沢農業学校、水沢商業高等学校は大正13年（1924）に町立水沢商業実践学校として設置された実業学校で、尋常小学校卒業後の進学先として多くの人材を育成しました。なお、幼稚園も水沢幼稚園と岩谷堂幼稚園の2園が大正時代に開園しています。

学校系統図（大正・昭和）

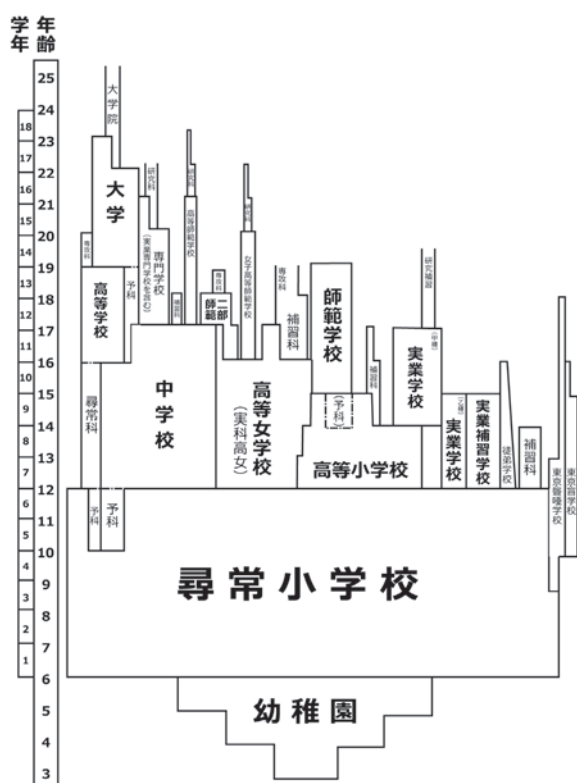


図3 大正8年

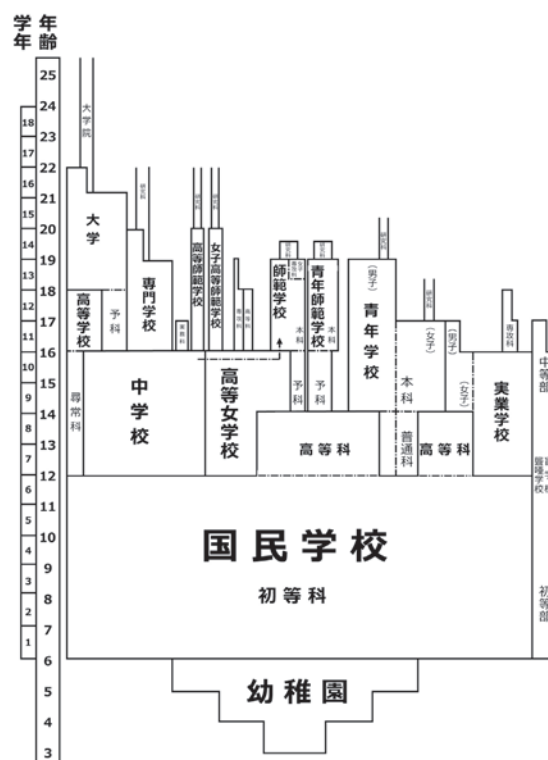


図4 昭和19年

文部科学省「学校系統図」を引用・加筆

〔学校の歴史〕

国民学校と戦後教育の確立

昭和期に入ると、世界情勢の変化を踏まえて次第に戦時下教育の性質が強く示されるようになってきました。この時期に重要な役割を果たしたのが、昭和12年（1937）に内閣に設けられた「教育審議会」でした。その答申に基づいて小学校が「国民学校」へと改変されたほか、厳しい戦局の中で国民としての任を果たす人材育成を目的とした教育の基本精神と内容、方法論が示され、施行されていきました。また、教育現場では勤労奉仕の強化や修業年限の短縮、集団疎開、学徒動員の実施など、通常のエ育活動が制約される困難にも迫られました。

国民学校で最も多く行われたのが勤労作業でした。作業内容は高学年の食糧増産、縄ない、薪炭運び、リンゴの袋かけ、出征兵士家庭への援農奉仕、低学年のイナゴとり、薬草とりなど、地域によって様々で、教員も作業に際しては率先垂範、児童とともに勤労作業に挺身しました。こうした教育体制は昭和20年（1945）の第二次世界大戦終結まで続き、特に高等科の生徒は勤労作業が多く、作業のない日に学習するといった状況でした。

終戦後は学校を平時体制へと戻すため、疎開児童の復帰や授業の再開等が実施されました。また、連合国最高司令官総司令部（GHQ）による教育改革令が発出され、教育内容、教職員、教材等の刷新に関する包括的な指示とともに、国家主義や軍国主義の排除が示されました。その後、内閣に設置された「教育刷新委員会（後に教育刷新審議会）」による学制に関する建議に基づいて教育基本法、学校教育法などが公布され戦後教育の仕組みが確立。ここに初めて米国をモデルとした「6・3・3（小学校6年、中学3年、高校3年）」の単線型の学校教育制度が導入されましたが、米国には存在しない学生服の着用や細やかな規定のある校則といった日本独自の学校文化には、明治期の学制施行以来からの連続性もみられます。また、私立を中心に戦前からの中高一貫教育も長らく行われており、近年では公立校でも導入されるようになってきました。



藤里国民学校



キジ
(剥製)
旧人首小学校

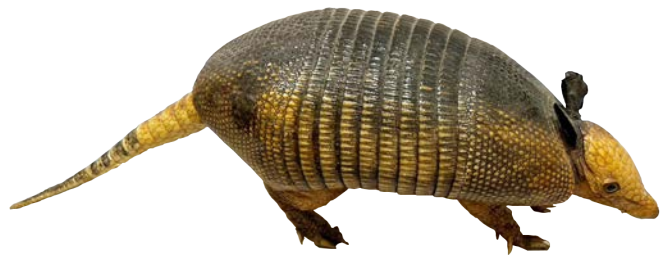


【参考】 岩石標本
旧人首小学校

地質資料が豊富な北上山地に所在する江刺地方の学校では、教職員や地元の愛好家などが採取した地域所産の自然史標本が多く残されています。



土器・石器
旧梁川小学校



コノツオビアルマジロ
(剥製)
旧赤生津小学校

剥製台座に付される基本情報には、「前沢赤生津からブラジル移住した佐藤善治氏から寄贈」とあります。戦前・戦後を通じて岩手からのブラジル移民は800家族以上あるとされ、郷里では珍しい南米の動物を標本として贈る事例がみられます。

学校生活の思い出

学校は、教科について学ぶとともに、社会生活の基本を身に着ける場でもあります。

子どもたちは掃除や給食などで子ども同士や教師とのやりとりを通してルールやふるまいを学んでいきます。また、運動会や社会科見学では、地域住民と交流し、社会についての視野を広げていきます。

指導教材は子どもたちの学びを助けます。算数や物理など目に見えない概念を学んでいく過程で、模型や実験装置を使って可視化することで、その理解が進みます。岩石や鉱物、動植物の標本は地元のものが学校に多く保管されており、自然についてより身近な教材を使って学習できる配慮がされています。学校にある郷土史資料や自然史資料の収集は、地域の人に関わっており、子どもたちの郷土の学びのために学校へ持ち寄られたものです。

【コラム】

学校にある標本

学校の理科室には、標本や模型、実験装置などが並んでいます。

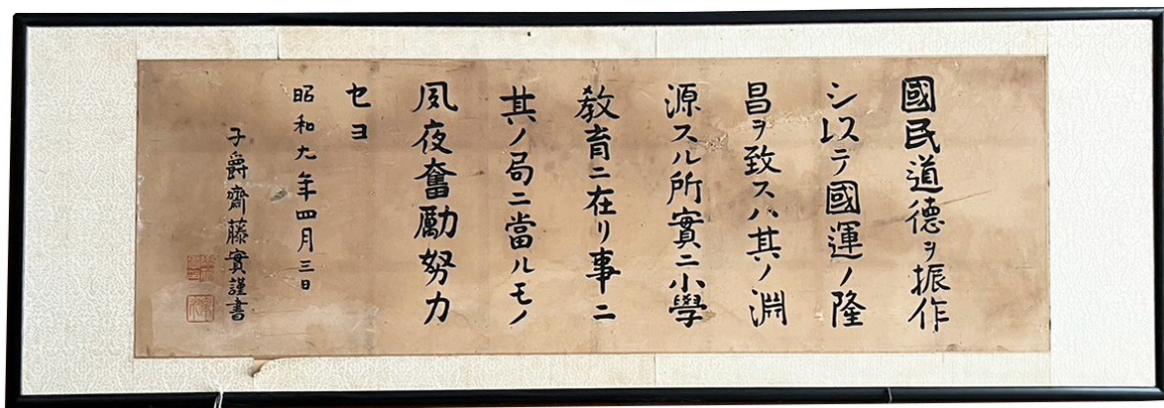
人体模型、他県の鳥類の剥製標本や昆虫・植物標本などは、専門業者による製作です。明治時代に始まった理科教育では、自然の観察と知識習得に重点が置かれており、標本や掛け図などが授業で使用されていました。これらは島津製作所標本部など、教育用の模型や実物標本を製作する専門業者によって全国の学校へ供給されていました。

また、地元の自然史標本も学校に多く残されています。学校の近くで採集された鳥類や哺乳類の剥製標本、岩石や化石、昆虫標本などです。教師の手で採集された標本も見逃せません。胆江地方では、中田剛^{たけし}、岩淵初郎^{はつお}など理科の教師が、生物や地質を採集・調査し、その成果を論文として発表するなど、地域のナチュラリストとして活躍しました。丁寧に書かれた標本ラベルや解説から、彼らが自然への深い理解を持つと同時に、その感動を子ども達に伝えようとしたことがうかがえます。さらに、採集地・採集年月日の基本情報ラベルがついた標本は、この地域の過去の生物相を物語る大切な自然史資料で、将来研究に活用可能で学術的な価値を持ちます。



【参考】中田剛採集の昆虫標本

(えさし郷土文化館 2023 年企画展「学校のおもかげ」より)



齋藤實書額
昭和9年（1934）
旧胆沢愛宕小学校



【参考】 後藤新平肖像
油彩・キャンパス 大正9年（1920）
五味清吉 画
旧前沢小学校



【参考】 齋藤實肖像
油彩・キャンパス 大正9年（1920）
五味清吉 画
旧前沢小学校

郷土の先人

学校には額に入れられた絵画や、墨と筆でしたためられた書を装丁した扁額などが飾られていることがあります。このような美術作品は、先人から学校に贈呈され、現代まで大切に保存されてきました。

市内では、五味清吉の絵画や森田純の版画、後藤新平や齋藤實の書などが学校資料の中に含まれています。これらの地域出身の先人による作品は、自身が生まれ育った地域の学校に送られていることが多いのですが、齋藤實の書は地域を限らず広く分布しています。

学校でみられる美術作品は、その多くがその学校出身の先人が作成したのですが、例外もあり、どのような経緯で学校に送られて飾られたのか、更なる検証が必要です。

奥州市出身学芸職員による
学校の思ひで話し



旧前沢小学校の思い出

M 学芸員（旧前沢小学校卒業）

今から 40 数年前、私が入学した当時の旧前沢小学校は、真っ白い外壁がとてもきれいな近代的な校舎でした。

大人になってからわかったことですが、それもそのはず、その校舎は新築 3 年目の校舎だったのです。そんなきれいで近代的な校舎の中で異彩を放っていたのは、体育館と校舎をつなぐ渡り廊下にあるトイレでした。それは木造で床はコンクリート打ち放し。当然、水洗ではなく、溝状になっているコンクリートに板を渡したもの？（やや記憶があいまいですが）が便器という代物でした。落っこちそうで実に恐ろしく、なるべく行かないようにしていたものです。高学年ぐらいになり、しかし、なぜここだけこんなに古びた施設なのだろうと疑問がわいてきます。何となく聞いた話では、前沢小学校は戦前から女学校だったとか。あのトイレはもしかしてその時代の建物だったりしてと思い、さらに怖くなったのと同時に、近代的な現校舎の裏にある歴史を漠然と感じたものです。

今回、沿革を調べてみると、前沢小学校は昭和 14 年に校舎が立て替えられているので、おそらくその時代の建物だったのでしょう。また、小学校の場所は江戸時代の前沢のお城跡であることも聞いていて、その跡地に通っているのが少し誇らしいような気もしていました。いま思い返せば、学校の東には堀跡とおぼしき大きな水路が流れており、その向かいには古い門のある立派なお宅が並んでいました。学校には享保雛などもあり、お城だった雰囲気がとてもよく残っていたものです。

歴史に興味、関心を持つようになったのは、そのような歴史の色濃く残る学校に通ったおかげだったのかもしれない。



奥州市出身学芸職員による
学校の思ひで話し



居館跡に置かれた旧前沢小学校

E 専門調査員(旧前沢小学校卒業)

桜の名所お物見公園の麓にある旧前沢小学校は、江戸時代に居館が置かれていた場所でした。奥州街道沿いに所在する前沢には、前沢所が置かれ、伊達一門である三沢氏が治めていました。三沢氏は、三沢初子が三代藩主伊達綱宗の側室となったことをきっかけとし、初子の弟の宗直が、その縁で仙台藩に召抱えられ、延宝3年(1675年)に仙台藩家格一門に取り立てられました。その後、延宝9年(1681年)移封され、幕末に至るまで、前沢を知行地とします。

現在、居館の痕跡は残されていませんが、旧前沢小学校には居館の表門が移築されています。この表門は、明治時代に払い下げられ、個人宅の門として通用されていましたが、近年になり、里帰りしました。本来、表門は、旧校舎の昇降口付近にあったとされ、旧校舎全体が居館域と推察されます。居館跡は、旧校舎を中心として、北側に御沢川が位置し、旧校庭から旧校舎へ石段を上った場所に堀があったとされます。旧校庭には、重臣屋敷が配置され、学校外の下小路には、武士の屋敷地が軒を連ねていました。

思い起こすに、昭和・平成時代の前小生は、徒歩による通学でしたが、その通学路は道幅が狭く、クランクの多い印象がありました。これは、当時のままの路地であり、江戸時代にタイムスリップしたかのような印象があります。また、板塀に囲まれた屋敷地や、暗渠化されていなかった御沢川など、その情景が思い出されます。

旧前沢小学校は、敷地そのものが史跡であり、歴史を日常体験できた学校でもありました。



三沢氏居館 表門

奥州市出身学芸職員による
学校の思ひで話し



山の上の学校

M解説員（旧伊手小学校卒業）
（旧江刺南中学校卒業）

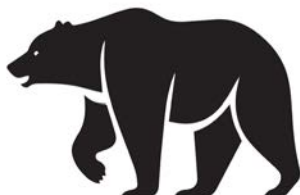
中学生の頃まで学校は山の上にあるものだと思っていました。

テレビで見るドラマでは住宅街の道を、横断歩道を渡って校門に入る風景を見ましたが、それは都会の学校のことで、多くの学校は山の上にあるものだと信じていました。

私の通った伊手小学校、江刺南中学校は山にあり、校内マラソンでゴールに向かう最後の坂道は「地獄の坂道」と語り継がれていました。江刺内の東側に位置し、種山高原と阿原山の麓に所在する伊手地区の小学校の敷地内には源休館跡げんきゅうかんとよばれる史跡があり、「義経北行伝説」ゆかりの地です。私が通っていた当時は学校の敷地内を通らないと史跡には辿り着けないため、見学に訪れる人がどのくらいいたかは定かではありませんでしたが、近年は学校の敷地内に入らなくても行けるよう道が整備され大事にされています。

地域は山に囲まれ、沢沿いに集落が展開しているためか、当時からクマの目撃情報が多く、小学校の運動着が蛍光オレンジでとても目立つ色なのは、クマ除けのためだとまことしやかに言われたものです。

そして、入学した江刺南中学校は伊手と藤里の生徒が通う学校で、それまで別々の中学校が統合され新しく建てられた校舎でした。教室にはストーブではなく天井に暖房機、トイレにもオイルヒーターがついていて床がタイル貼りではなくゴムマットのような凹凸の無い床材、便器は和式でしたが小学校時代の薄暗いじめっとした感じがなく掃除が楽で家よりもかなり快適だったと記憶しています。背後にある銚子山の北側には当時、松茸が生えると聞きましたが素人のためか発見することはできませんでした。お猪口を伏せたような山の形で、なぜ銚子？と不思議に思いますが、国道397号線から藤里に入ると目の前に見える銚子山はホッとする風景の一つです。





金津流梁小獅子躍り

学校と郷土芸能

教育課程のなかで、地域で伝承される郷土芸能に取り組む事例が多くあります。奥州市内の学校でも、鹿踊り（獅子躍）や剣舞、神楽などの郷土芸能が取り組まれており、その地域の特色を見ることができます。

郷土芸能に関する学校資料には、手作りの衣装や、子どもたちへの指導書などがあり、様々な工夫をしながら取り組んでいたことが伺えます。また、郷土芸能の取り組みは教職員だけでなく、芸能団体なども指導に携わることが多く、学校と地域の人との交流の機会でもありました。子どもたちも学校外の人との交流を通し実際に肌で感じながら、地域のことをより詳しく知るきっかけとなっていたのではないのでしょうか。このような取り組みは郷土芸能の後継者育成へも貢献しており、郷土芸能をはじめとする地域の歴史文化継承の一翼を担っていると考えられます。

しかし、学校が閉校すると、学校が担っていた「継承」という役割がなくなり、郷土芸能をはじめ特色ある地域文化が後世へ伝わりにくくなってしまいます。場合によっては失われてしまう恐れもあります。各地で学校の統廃合が進む現在、それらをどう継承していくのかがこれからの課題です。

【コラム】

「^{かなつりゅうやなしょうししおど}金津流梁小獅子躍り」(旧梁川小学校)の取り組み

江刺地域の旧梁川小学校からは、学校で取り組んでいた「金津流梁小獅子躍り」に関する資料を多数集荷しています。

「獅子躍り(鹿踊)」とは風流踊の一種です。五穀豊穡・悪魔退散・先祖供養等の祈りが込められた郷土芸能で、地域の儀礼や年中行事などで踊られます。宮城県北部から岩手県南部には「太鼓踊系鹿踊」が分布しており、身につけた太鼓を自ら打ちながらその囃子に合わせて踊ります。奥州市内でも各地で伝承されており、旧梁川小学校があった梁川地区でも盛んに活動される郷土芸能です。

「金津流梁小獅子躍り」は昭和57年頃、「獅子躍り体操」に始まり、昭和63年から金津流野手崎獅子躍保存会の協力を経て「金津流梁小獅子躍り」として学校教育に組み込まれました。カシラをつける高学年を中心に、低学年も口唱歌で参加するなど全校児童で取り組み、運動会や学習発表会などで披露されてきました。

集荷した資料には装束のほか、着付けの教本や躍りの指導書、「金津流梁小獅子躍り」に関する調べ学習の成果物などがあり、学校全体で地域の郷土芸能に力を入れて取り組んでいたことが伺えます。学校での取り組みを通し、子どもたちが地域の特色を知り、魅力を感じることで郷土愛が育まれていたのではないのでしょうか。



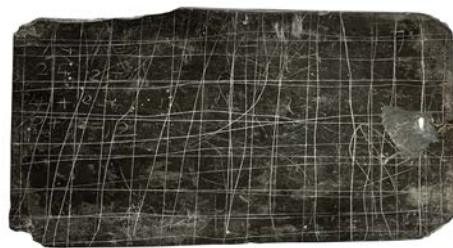
【参考】金津流梁小獅子躍りの資料

(えさし郷土文化館 2023 年企画展「学校のおもかげ」より)



膳写版（ガリ版）
旧白鳥小学校

明治時代から昭和期に全盛を迎えた簡易印刷機。鉄製のヤスリ板にロウ原紙を載せ、その表面に鉄筆で文字を書き大量印刷を可能にしました。



石盤（石板）
旧梁川小学校

明治時代を中心に 20 世紀初頭まで使用されていた筆記用具。ろう石（蝟石）の石筆で文字を書き、布で字を消しながら繰り返し使用しました。



南極の石
旧玉里小学校

「南極観測隊」に参加した玉里大森の後藤敏雄氏による寄贈。南極の石は、当時の昭和基地があったオングル島の名から、オングル石とも呼ばれ、この地域の石はおおよそ 6 億年前（先カンブリア時代）に起源を持つ古い片麻岩と考えられています。



伊手小学校校歌原譜
旧伊手小学校

伊手小学校校歌を作曲した鷹嘴洋一による原譜。鷹嘴は、岩手大学教授として岩手県内における音楽教育の基礎をつくり、多くの学校の校歌を作曲しました。同校歌の作詞者である佐藤孝一の曲の方向性を巡る書簡も残されています。

こんなものも学校資料？！

集荷した学校資料の中には、なぜこれが学校に？というものが多々見受けられます。

神楽の面、民具、南極の石、ヤシの実、土器や石器など、民俗、自然史、考古と多岐にわたります。

これらの資料の中には、地域の方々から学校に寄せられたものもあり、地域学習に役立ててほしい。こんな珍しいものを子どもたちに見せたい。あるいは、触れることで興味を持ってもらいたい。そんな気持ちがあったのかもしれませんが。

地域と学校が一体となって子どもたちの学びを助け、成長を見守っていた姿が浮かんできます。

また、地域から資料が持ち込まれる背景には、学校が、その地域における「博物館のような文化施設」としての役目、機能を期待されていたからと考えられます。

【コラム】

〔地域を学ぶ〕 学校で編纂^{へんさん}された『郷土教育資料』

大正末期から昭和初期の時代は、教育界で「郷土教育」と呼ばれる実践が全国的な広がりをみせ、関係書物も多数出版されるなど、それらに関わる議論も高まりました。

学校現場における具体的な施策の一つが「郷土資料室」などの設置で、主に師範学校や高等学校で地域資料が収集されるようになり、いわゆる「学校博物館」といえる機能が次第に成立します。この機運は地方にも広がり、地域の尋常小学校などにも地元住民から歴史や自然史に関する資料が提供され、それを受け教職員が資料の調査・管理をするといった現在の博物館学芸員と同等の活動が行われるようになりました。ほかにも『郷土読本』の刊行や郷土遠足等の行事が開催されるなど、郷土教育は高まりの一途を辿り、大正14年(1925)には江刺郡岩谷堂町で開催された岩手県教育会江刺郡部会の主催による「奥羽史講習会」と併せて「考古資料展覧会」の開催、並びに『岩手考古図集』の刊行も行われました。なお、この事業の中心を担ったのは教員で県史跡名勝天然記念物調査員も務めた小田島祿郎で、講習会の講師には東北帝国大学(現 東北大学)の喜田貞吉や東京帝室博物館(現 東京国立博物館)の高橋健自などが名を連ねました。

こうした郷土教育の流れは、昭和期には文部省が主導する形で全国的に奨励され、当初の地域における基礎研究から軍事的な緊張の高まりによって、次第に愛郷心、愛国心を求める性質へと変貌を遂げます。

岩手県と岩手県教育会は『岩手県郷土調査要項』を作成し、昭和14年(1939)8月に尋常小学校の教員を招集して翌年の「皇紀2600年」を記念した『郷土教育資料』の作成を計画。「皇紀」とは明治政府が定めた日本独自の紀元で、神武天皇が即位した年を記紀(『古事記』と『日本書紀』)の記載から紀元前660年と定め、その年を皇紀元年としたものです。

こうして国策としての記念事業の一環に位置付けられた岩手の『郷土教育資料』ですが、昭和15年8月の完成を目途に教職員らによって調査・執筆が進められた一方、その内容は政府が推し進める国家主義とは一線を画し、柳田國男の文献を参照しながら、生活・文化・自然・労働・経済・財政・習慣など民俗学の調査項目に対応した方向性によって作成。当時の岩手県下461校の小学校のうち、357校が調査結果を冊子として刊行しています。

こうした岩手県の方針の本質は不明ですが、少なくとも当時の社会情勢の潮流とは異なりながらも健全な地域研究が蓄積され、戦後に編纂される自治体史等の底本としても積極的に活用されました。



【参考】 江刺郡梁川村郷土教育資料
旧梁川小学校

【コラム】

旧黒石小学校と黒石寺蘇民祭

旧黒石小学校の立地する水沢黒石地区には、蘇民祭で有名な妙見山黒石寺があります。

黒石寺蘇民祭は、疫病防除や五穀豊穡を祈願することを核とし、旧暦の正月7日から翌朝にかけて黒石寺境内で行われ、下帯姿の男達が蘇民袋を奪い合う「蘇民袋争奪戦」が最大の山場となっています。1000年以上の歴史があるとされ、多くの人々の支えによって続けられてきた祭りですが、令和5年12月、黒石寺は担い手不足などを理由に、令和7年以降の蘇民祭を実施しないことを発表し、令和6年をもって、その長い歴史に幕を下ろしました。

旧黒石小学校から集荷した学習発表会用の衣装や小道具には、黒石寺蘇民祭にまつわるものも残されており、それをテーマにした劇が演じられたことが伺えます。他にも、蘇民祭をモチーフにした図工作品が残されていたほか、「蘇民太鼓」という創作太鼓の発表に関するものなどもあり、学校での取り組みに地域行事の要素を取り入れていたことが分かります。

各地域に伝わる歴史文化は様々であり、学校という視点からもその特徴を見ることができます。



奥州市出身学芸職員による
学校の思ひで話し



小さな詩人たち

K 解説員（旧木細工小学校卒業）
（旧江刺東中学校卒業）

木細工小学校での思い出は冬の遠足で越路スキー場に行くのが楽しみでした。

遠足に行く日までは基本校庭で練習していたのですが、斜面を滑る練習は近所に住む方の山の斜面をお借りして練習していました。練習場所には驚きでしたが、お陰でスキー場に行っても怖くなく楽しく滑れました。今はスキーに行くことがないので小学校の頃に経験出来たことはいい思い出です。

また、学校全体で特に力を入れて取り組んでいたのが作文でした。身の回りで起きたこと、発見したことなど様々なものから題材を選んで書き、先生方、時には友人達からアドバイスを受けて作品を完成させていたのを覚えています。閉校式のときに久しぶりに校舎内を見て回ったのですが、廊下に飾られた賞状などにこれまで沢山の人が一生懸命に取り組んだ成果なのだと改めて思いました。

江刺東中学校といえば思い浮かぶのは長い坂が一番に出てきます。登下校はスクールバスを利用していたのですが、校門から校舎までの坂道は部活動の走り込みでよく使っており傾斜がつかく大変だった思い出があります。また、坂の隣に墓地があった為、日が暮れてから通るのを苦手に思っていたものです。



奥州市出身学芸職員による 学校の思ひで話し



キュビズムな中学校

I 学芸調査員（旧小山中学校卒業）

私の小山中学校の思い出がかたちを取るならば、ピカソのゲルニカになるでしょう。

原寸よりも小さく、近代的な細い金属の額に囲われたその絵は、校舎の西側端にある階段の踊り場に飾られていました。2階へ上る途中の踊り場であったと思います。体育館の2階ギャラリーへ続く階段で段差を踏み外し捻挫したような印象的なエピソードがあるわけではありませんが、毎日のように目にしていたからか、学び舎の思い出と聞いてこれが真っ先に脳裏に浮かびました。通りがかるたび、絵の中のランプの部分をも人の目のようだと思ったことを覚えています。

中学校の校舎前には広いロータリーがありましたが、これは新校舎が建てられたあと、北側にあった旧校舎を取り壊したために発生した地帯だと母に聞いたことがあります。新校舎の場所には胆沢第一小学校の前身となる小山小学校が建っていて、第一小学校の新設に伴い取り壊されたところへ中学校の校舎が新設されました。小山中学校の跡地には給食センターが建ちますが、学び舎として半世紀以上使われていた土地に再び学生にまつわる施設が出来ることは、土地の記憶が連続しているようで面白いものです。

長く大切にされたものには、大切にされた時の記憶が宿るといいます。

建物や土地にも同じことが言えるかもしれません。



資料整理からデジタルアーカイブ公開までの手順

佐々木紫帆（合同会社 AMANE 学術専門員）

（えさし郷土文化館「地域史研究講座 2024」資料より）

1 調査概要

2 調査方法

予備調査・本調査・撮影

3 調査結果

概要・デジタルアーカイブ



科研22K18485：挑戦的研究萌芽 地域資料の戦略的選別のための資料の関係性に着目した横断的共有手法の実現

1. 日程 下調査：2023年5月24日（1日間）、本調査：7月7日・10日～12日（4日間）、データ作成7月～9月
2. 場所 えさし郷土文化館
3. 参加者 奥州市教育委員会（1名）、えさし郷土文化館（1名）、金沢大学学術メディア創成センター（1名）、合同会社AMANE（3名）、AMANE共働研究員（1名）
4. 目的 学術資料を抜けなく後世に残すという、学術資料の保存において、実現が困難とされていることにチャレンジする。「学術資料の関係性に着目した横断的共有モデル」、「戦略的選別」をしつつ、抜けのない学術資料の計画的保存を目指す。
5. 内容
 - ・地域資料の概要調査、目録作成及び画像デジタル化を実施し、段階的にWEB上で公開・共有する。
 - ・公開にあたって、様々なリスクやメリットについて議論し、検証を行う。
6. 成果
 - ・概要調査の結果、閉校した小学校の資料計2157点の所在を確認できた。
 - ・上記資料のうち、文書類を中心に学校資料の多様性・重要性があらわれている資料884点の写真を撮影。
 - ・撮影した884点の資料の中から、学校資料の特性があらわれている100件のメタデータを作成し、うち現時点で公開不可能な個人情報を含まないと判断した94件についてデジタルアーカイブでの公開を行った。

対象資料

令和4年度で閉校し、各校の協力のもと収集された資料
（奥州市教育委員会・えさし郷土文化館により収集）

- ・人首小学校
- ・梁川小学校
- ・木細工小学校
- ・藤里小学校
- ・伊出小学校
- ・広瀬小学校
- ・大田代小学校

計7校分



予備調査

2023年5月24日（1日間）

1. 目的

本調査計画の検討・立案のため、対象とする資料の選択、作業量の見積り、現場状況の把握などを実施。デジタルアーカイブ作成・立案のため、現状を把握・検討。

2. 手順

資料をえさし郷土文化館へ移動。各校ごとに保管エリアと箱数を確認、内容を簡易記録。

→各校資料について調査票を記入・現状の撮影

→デジタルアーカイブ作成にあたり、公開基準・撮影候補資料を検討

3. 結果

- ・7校計130箱を確認
- ・写真撮影、リスト化候補のおおまかな選定
- ・本調査作業量・内容の詳細確認（参加人数、作業量等）



運び込まれた資料群（一部）

調査票の記入・現状の撮影

記録者（ ） 奥州市所蔵学校資料予備調査 調査票 R5年 5月 24日（水）

史料群名	広瀬	
保管場所	えさし郷土文化館・おだき文化財保管庫・その他（ ）	
箱数（現状・数）	ダンボール 11個 × 7	皿 7個
整理状況	11個の本 6冊、模型 × 1	
大まかな位置、メモなど		
ダンボール ①	アクリル板	学校資料 × 4 昭和52年 18490 73~ 16
ダンボール ②	文書箱	学校資料 × 1 学校日記 78冊
ダンボール ③	アクリル板	学校日記 × 14冊 539~114
ダンボール ④	英健美茶	職員内通書 簿 2冊 児童通書 2冊 学校日記 2冊
ダンボール ⑤	15冊	修業記録簿 修業簿 4冊



本調査

7月7日・10日～12日（4日間）

1. 目的

- ①メタデータ作成のための情報整理
- ②写真撮影対象の絞り込み
- ③個人情報に触れる資料の確認、撮影・公開基準確定のための精査

2. 手順

- ・原秩序があまり重要でないと思われるものについては箱の入れ替え
- ・資料容器に史料群名・調査年月・調査者・事業名・箱番号を印字したラベルまたはタグを付す。
- 現状（ラベル・外観・中身）撮影、撮影データの共有
- 本調査記録用紙へ記入

現状の撮影、タグの付与



撮影（本調査と同時進行）

1. 目的
 - ①メタデータ作成のため
 - ②デジタルアーカイブ掲載のため
1. 手順
 - ・資料1点毎に、ホワイトボード（学校名・箱番号・事業名・撮影年月日・撮影場所）を撮影した後、資料本体の撮影を行う。



撮影

- ・必要事項を書いたホワイトボードを写した後、スケール・カラーチャートと共に資料の撮影をする。



本調査の結果

- ・ 7校分の資料群、合計1949点の資料の概要調査を実施
- ・ 学校日誌や標本、祭の道具など、多様な資料が多く含まれる。
- ・ 学区を中心として地域に関する資料もあり、地域における文化的な中心を担う施設の一つとしての性質が資料群にも現れている。
- ・ 個人情報が含まれる資料の撮影・公開基準の設定
- ・ AMANE Archivesへの掲載
- ・ 今後も続く予想される学校統廃合の際の資料収集・活用事例としても貴重

学校名	資料点数
人首小学校	579
梁川小学校	507
木細工小学校	330
藤里小学校	264
伊出小学校	122
広瀬小学校	135
大田代小学校	12
合計	1949

展望：個人情報の取り扱い、中身の確認・撮影について段階的に判断していく必要がある。

AMANE Archives



公開機関：合同会社AMANE

URL：https://ourarchives.amane-project.jp/

システム構成：

AlmaLinux8+Omeka-S Ver.4.0+IIPImgサーバーを
ローカルマシンの仮想サーバー（KVM）上に構築



- ・ AMANEが調査に関わった学術資料情報を「逐次公開」の考え方にに基づき公開
- ・ オープンソースソフトウェアの活用およびシステムの仮想化
- ・ 資料データの分散保存（金沢・仙台・東京）
- ・ 利用規約においてサービスの365日24時間安定提供義務の放棄を明記

AMANE Archives での公開

- ・ 公開版メタデータとして作成した94件を、
「学校資料アーカイブ」>
「奥州市学校資料」
として公開。



AMANE Archives

AMANE Archives ようこそ welcome 利用規約 Terms of Use 閲覧 Items

奥州市学校資料

Our City School Education Resource

近年の全国的な少子化・人口減少に伴い各地で学校の統廃合が進んでいる中、高市町教委も例外ではなく、2022年度末に小学校4校が閉校となった。これを受けて奥州市教育委員会・えさし郷土文化を定む会も意識し、本調査の対象となる学校・地域に受け継がれる貴重な資料が多く残されていることが分かっていく。2023年秋には、えさし郷土文化館にて企画展「学校のあともかき」展（https://www.esashi-museum.jp/exhibition/2023/10/01/omokage/）を開催された。

これらの資料群の中から個人所有の記録がある資料を整理、整理し、学校に引き継ぎ、関係者が活用できる多様な資料を公開し、「奥州市学校資料アーカイブ」として公開する。本調査時の調査は、2023年7月～7月にかけて、奥州市えさし郷土文化館において複数回実施された。

本調査に参加したメンバーを以下に示す。

奥州市学校資料調査参加メンバー

調査総括	野村 秀樹	（奥州市教育委員会事務局歴史文化課長）
調査協理	（えさし郷土文化館）	
調査員	野村 秀樹、佐々木 孝典、（合同会社AMANE）	
大田代 秀樹	（奥州市立大学）	
調査員	（合同会社AMANE）	

本アーカイブでは「逐次公開」の考え方に基き、調査中や調査後の資料群の公開を実施する。※「逐次公開」についてはこちら

本調査の一環は、研究員2023年度「奥州市研究」で「地域資料の整理・選別のための資料の整理・選別に関する調査」の実現により行われた。

石版・石版
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

1石版・2石版・3石版
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

（奥）学書在法 其 妙在人
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

江刺市内小学校球技大会男子の部優勝カップ
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

奥川小学校（校旗）
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

野手崎尋常高等小学校（校旗）
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

奥物部紙
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

獅子舞り囃子付のし
学校名：奥州市立大学 学校名：奥州市立大学

AMANE Archives掲載データの作成

1. 一部資料のメタデータの作成

資料画像に平成以降の生徒の氏名など個人情報に記載された資料は除外し、公開可能な資料のメタデータを作成。

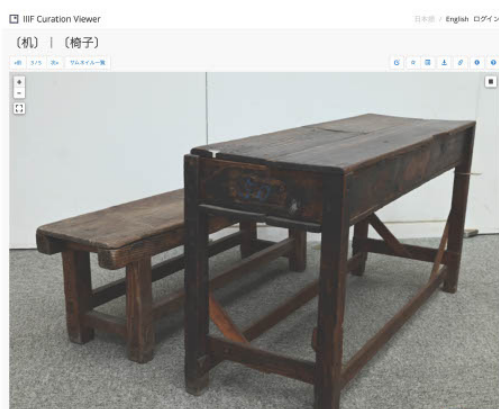
1	通し番号	学校略称	学校番号	資料番号	資料名	年代	作成者	学校名表記	データ作成者	データ作成日
2	01	ide	01	02001	伊手小学校校歌〔楽譜〕	[昭和45.11.3制定]		伊手小学校	合同会社AMANE	2023-08
3	02	ide	01	05004	伊手小学校校章〔図案〕	昭和45.11.3制定		伊手小学校	合同会社AMANE	2023-08
4	03	ide	01	05006	教育百年誌関係図				合同会社AMANE	2023-08
5	04	ide	01	05009	教材費国庫補助金備品台帳	昭和28年度以降	上伊手小学校	上伊手小学校	合同会社AMANE	2023-08
6	06	ide	01	08001	学校教育目標				合同会社AMANE	2023-08
7	07	ide	01	09001	〔四年級示物〕				合同会社AMANE	2023-08
8	08	ide	01	10001	きらきらぼし〔掲示物〕				合同会社AMANE	2023-08

2. 公開基準

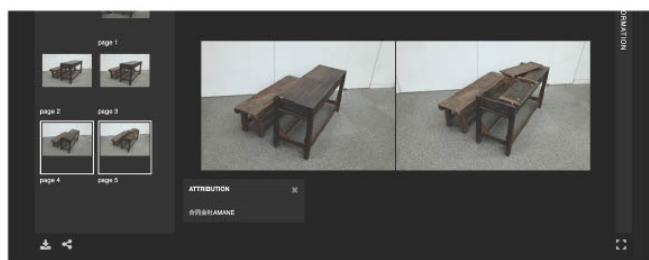
- ・平成以降の児童の氏名などを始めとした個人情報を含まない。
- ・学籍簿など、資料の中身に個人情報を多く含むものについては表紙などのみの撮影・公開とし、資料の存在を肯定する。



学校日誌（広瀬小学校 昭和29年度）



〔机〕 | 〔椅子〕（梁川小学校）



〔机〕 | 〔椅子〕

タイトル	(机) (椅子)
作成者 / Creator	梁川小学校
内容記述 / Description	学校名: 梁川小学校 学校名表記:
公刊者 / Publisher	合同会社AMANE
寄与者 / Contributor	えさし郷土文化館・熊本市教育委員会・科学研究費助成事業: 創発的研究(研究) 22K18485・金沢大学学術メディア創成センター・合同会社AMANE
資源識別子 / Identifier	07-06001
発行日 / Date Issued	2023/9/1
別の記述形式を持つ / Has Format	https://ourarchives.amane-project.jp/manifest/oshu-gakko/07-06001.json
ライセンス	https://ourarchives.amane-project.jp/rules

作屋敷遺跡

調査機関:(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

作屋敷遺跡は奥州市胆沢南都田字独光地内に所在し、北側には国道 397 号が東西に走る幹線道路沿いに位置します。本遺跡は、胆沢扇状地に形成された段丘面の中で現胆沢川に近い低位段丘(水沢段丘)の高位面に位置しており、調査面積が 1,465 m²で、標高が 95.0 ～ 96.2m です。

作屋敷遺跡は、これまでに平成 5 (1993) 年に旧胆沢町教育委員会、平成 22・23 (2010・2011) 年に当センターなどが調査を行っており、奈良時代と平安時代の集落を主体とする遺跡であることが分かっていましたが、今回の調査から遺跡範囲の北西部には中世の遺構群が広がることが新たに確認されました。

今回の調査で検出した遺構は、鎌倉時代後期(13 世紀後半)と考えられる掘立柱建物跡 16 棟、土坑跡 14 基、井戸状遺構 1 基、溝跡 10 条、池状遺構 1 基、柱穴状ピット 803 個(掘立柱建物分を含む)です。

出土遺物は、平安時代の土器(土師器・須恵器)、鎌倉時代後期(13 世紀後半)の中国産龍泉窯系青磁碗、常滑窯産甕・片口鉢、東北地方窯産甕・片口鉢(宮城県伊豆沼窯か)、ロクロかわらけ、轆羽口、やっここ、釘、鋳物(鍋か)、鍛冶滓、銭貨(さし銭・すべて北宋銭か)、滑石製石鍋(長崎県西彼杵産か)、金床石、砥石、台石、不明石製品、柱根です。

検出した掘立柱建物は少なくとも 4 グループに分けられ、それぞれ 2 ～ 5 回の変遷が認められることから、4 時期以上に亘って複数回の建て替えが連続的に行われたと考えられます。また、主屋と見られる両廂もしくは三面廂建物も複数存在しており、井戸や池など屋敷を構成する遺構がまとまって見つかることから、一般集落とは異なる様子がわかります。調査区東側からは、これらの遺構群を巡る可能性がある区画溝も検出していることから、在地小領主など有力者の居館と捉えられ、一町規模の方形館の可能性あります。

鎌倉時代後期の胆沢郡は有力な関東御家人である地頭葛西氏の所領であり、葛西氏は奥州藤原氏の有していた磐井・気仙・胆沢・江刺の四郡に興田(一関市大東町)と黄海(藤沢町)の二保、牡鹿郡(宮城県)の広大な地域を支配していました。胆沢郡は葛西家臣である柏山氏が直接統治しており、居城である大林城(柏山館)と本遺跡は胆沢川を挟んで約 4 km(一里)の位置にあります。本遺跡は鎌倉時代後期において、葛西家臣柏山氏を支える有力な家臣の居館であったと推測されます。



調査区全景(直上から・上が北)



SB14 掘立柱建物跡全景(西から)



SX01 池跡断面(南西から)



SK01 土坑跡出土さし銭(東から)

まかばやしした 中林下遺跡

調査機関:(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

中林下遺跡は、奥州市水沢真城字中林下に所在します。発掘調査は令和2年度に始まり、令和5年度は4回目となります。調査区は遺跡範囲の北西端、1,820㎡を調査しました。

今回見つかった遺構は、平安時代(9～12世紀)の竪穴建物跡1軒、土坑跡8基、溝跡1条、中世(15～16世紀)の土坑墓跡1基、土坑跡1基、溝跡1条、近世(18～19世紀)の溝跡1条、時期不明の土坑跡4基、溝跡3条、掘立柱建物跡4棟、柵列跡2条、柱穴跡約300基、焼土2基、性格不明の遺構2基となります。

出土した遺物は、縄文土器少量、古代の土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器(青磁・白磁・渥美窯・常滑窯産等)が合わせてコンテナ2箱、瓦1点、古代～中世の銭貨(開元通宝・永楽通宝等)9枚、木製品(柄杓・杭・板材等)コンテナ3箱、中～近世の陶磁器、時期不明の砥石1点等があります。

古代のSK04土坑跡では、底面付近から敷かれたような状態で葦のような有機物と、それよりやや高い位置からは木製の柄杓が出土しました。土坑跡は現在も湧水が激しいことから、水場に関係する遺構であった可能性があります。

調査区南東側では、交差している2条の溝跡が見つかりました。古い時期の溝跡(SD02)は人為的に埋め戻されており、かわらけや国産陶器・中国産青磁が出土していることから12世紀代の溝と考えられます。新しい時期の溝跡(SD03)は、天目茶碗が出土しており、中世(15～16世紀)の溝跡と考えられます。溝跡の性格は、どちらも底面の高さはほぼ水平で、水が流れた痕跡も認められないことから水路ではなく区画用であったと考えられます。

調査区中央を除くほぼ全域で柱穴約300個が見つかっており、これらを組み合わせてできる掘立柱建物跡4棟と柵列跡2列を確認しています。掘立柱建物跡は2×2間以上、1×3間以上のものがありますが、柱穴が小さいことから小屋などの簡易な施設であったと考えられます。なお、柱穴からの出土遺物は少ないため、掘立柱建物跡や柵列跡の年代は不明です。

今回の調査では、古代～近世にかけて様々な遺構・遺物が見つかりました。ただし、調査区が遺跡範囲の北西隅に位置していることもあって、竪穴建物跡や掘立柱建物跡・柵列跡といった建物に関連する遺構は見つかりませんが、過去3年の調査に比べると少なく、一方で土坑墓や区画溝などが見つかり、集落あるいは屋敷地の中でも縁辺部に位置し、居住以外の目的(墓域など)で利用された範囲であったと考えられます。



中林下遺跡空撮(南上空から撮影)



調査区全景(直上、左が北)



SK04土坑跡と柄杓出土状況(南西から)



交差する2条の溝跡(北から)

まちやしき 町屋敷遺跡

調査機関:(一財) 奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センター

町屋敷遺跡は、水沢真城字垣ノ内地内に所在し、令和5年7月21日～9月22日まで発掘調査が行われました。調査面積は323㎡です。江戸時代の史料『安永風土記（あんえいふどき）』によると、この地域は瀬台野村と呼ばれ、「町屋敷」と称する屋敷地44軒があったとされます。平成29（2017）年に行われた（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査では、町屋敷44軒の一部が検出され、街村（がいそん。街道に沿って発達した集落）として軒を連ねていた様子がわかりました。また、平成12～13（2000・2001）年の発掘調査では、江戸時代の御蔵場跡（おくらば。仙台藩が管理した米蔵・出荷施設）が検出されました。

今回の発掘調査では、奈良時代の竪穴建物跡2棟、江戸時代以降の掘立柱建物跡1棟、時期不明の竪穴状遺構2基、縄文時代の陥し穴6基、土坑跡3基、道路跡1条、溝跡2条、柱穴状ピット（掘立柱建物跡などの柱穴）26基などが検出されています。縄文時代の陥し穴は、細長い形状で、深さが1mほどです。陥し穴は6基が密集していることから、獣を捕獲する狩場であったことが想像されます。

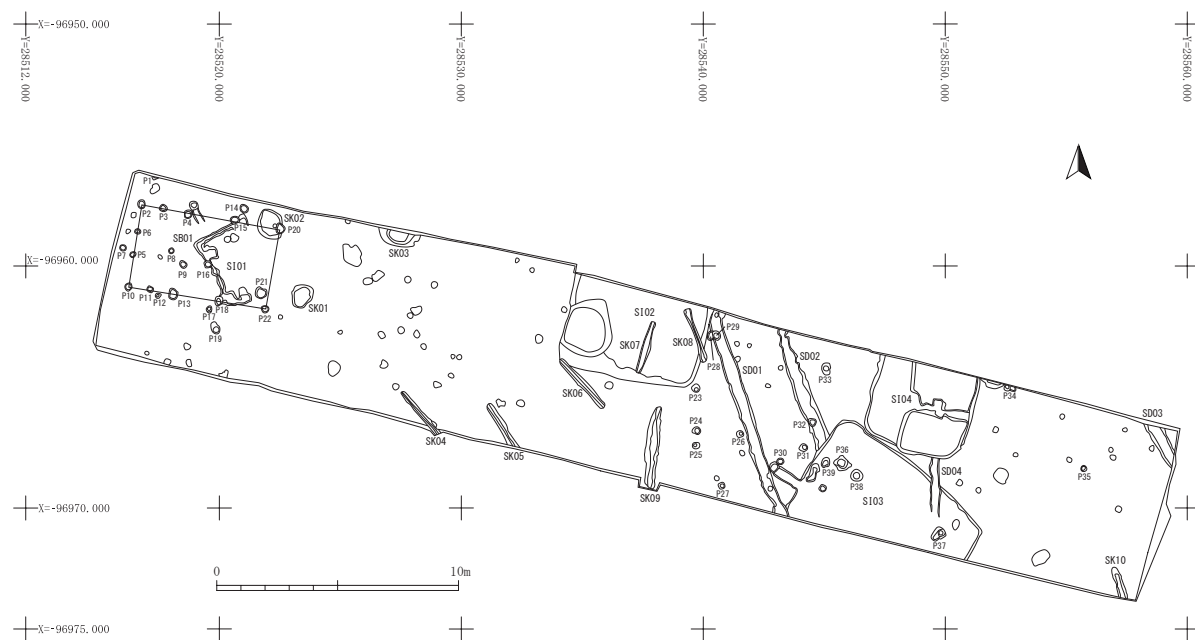
発掘調査の結果、縄文時代・奈良時代・江戸時代の複合遺跡であることがわかりました。また、掘立柱建物跡が複数存在していた可能性もあり、平成29年度調査に検出された街村の一部と考えられます。



調査区遠景（南上空から）



縄文時代の陥し穴（北西から）



町屋敷遺跡遺構配置図

しろとりたて 白鳥館遺跡 第22次調査

調査機関：奥州市教育委員会

2023年度の調査では、城館の主郭である郭Ⅱの南側が広場的な空間であったことや、古段階の城館に伴うと考えられる溝跡や竪穴建物の可能性がある遺構が確認されました。

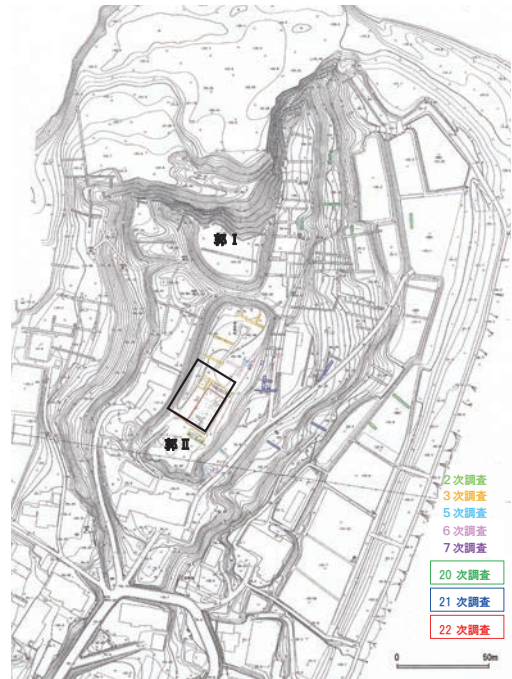
主郭である郭Ⅱの平場では、西側を削平して東側へ土を盛り、平坦面が造成されていました。平坦面には柱穴が全体的に分布しているものの建物跡を構成するような配列にはならないことから、今回の調査地点は、主郭の広場部分にあたるものと想定されます。3SB99の南側では、これに対応する柱列は確認されませんでした。また、鍛冶炉跡が1基確認されました。

溝跡 22SD15 は、東西に延びる溝跡です。東部は郭Ⅱの平場を造成したときの盛土層で埋められています。幅 1～2 m、深さ 20～70cm で、西に行くに従って幅が狭く、深さも浅くなります。これは郭Ⅱの平場の造成のために西側の土を削り出したことによって溝跡の上部が削られた結果、このような遺構の残存状況になっていると考えられます。このことから郭Ⅱの本来の地形は、今よりも西側が高く東側が低い細い尾根状の地形だったと推定されます。この溝跡は、郭Ⅱの平坦面を拡大した時の整地土で埋まっていることから、郭Ⅱの平場が造成される以前の遺構であり、古段階の城館に伴う虎口の遺構である可能性が高いです。

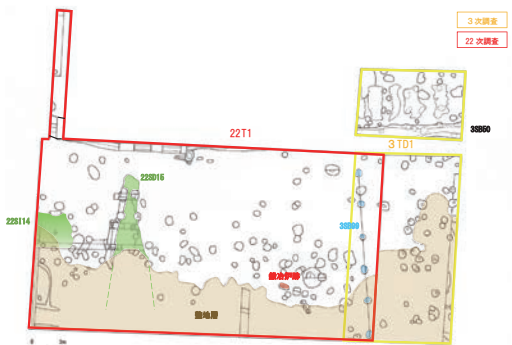
調査区南端では、竪穴建物跡の可能性がある遺構が確認されました。郭Ⅱの平場を造成したときの整地土が約 2 m 四方の方形に広がっている部分があり、整地土の下層から、さし銭とかわらけが出土しました。溝跡 22SD15 と同様に郭Ⅱの平場を作りだしたときに、上部が削平されたとみられます。整地土で埋まっていることから、古段階の城館に伴う遺構である可能性があります。

2023年度の調査では、郭Ⅱの南半には城館の主要な建物は見られず、広場的な空間として利用されていたことが把握されました。これにより主要建物は、郭Ⅱの北半部、現在の白山神社付近に存在する可能性が高まりました。郭Ⅱの北半部では、過去の調査でかわらけや中国産陶磁器が比較的多く出土していることから、この周囲に重要な遺構がある可能性が高いです。

また、現在みられる城館よりも古い段階の城館の遺構と推定される溝跡と竪穴建物状の遺構が見つかったことで、新旧2時期があることが再確認されました。古い段階には、郭Ⅱで現在のような広い平場は造成されておらず、幅の狭い平場を持つ尾根状の地形であったこと、東から出入りする通路があったことなど、古い段階の城館の様相の一端が明らかになりました。



白鳥館遺跡第22次調査区位置図



第22次調査遺構配置図



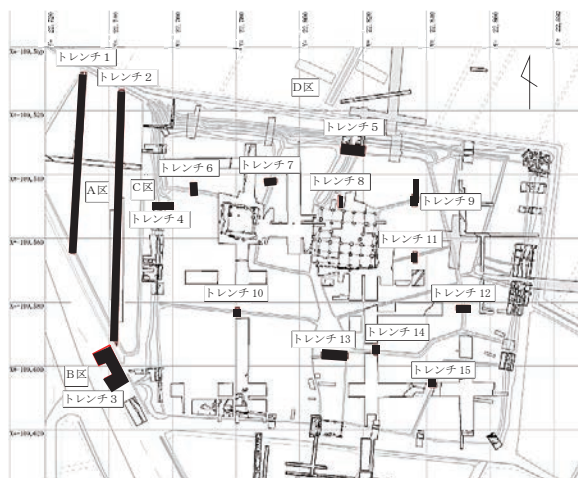
調査区郭Ⅱ全景（直上、上が東）

長者ヶ原廃寺跡 第21次調査

調査機関：奥州市教育委員会

国指定史跡長者ヶ原廃寺跡は、奥州市衣川田中西地内に位置します。2023年度の調査は、6月19日～11月10日に行われ、築地塀外西側の遺構分布、市道衣川橋六道線の旧道下の遺構、SF04築地塀跡西辺に所在する墓地の築地塀範囲を確認しました。また、SB03礎石建物跡（南門跡）の北側、SB01礎石建物跡（本堂跡）の基壇北辺の再調査と、築地塀内畦畔の表土の厚さを確認しました。

調査結果としては、築地塀外西側のA区とB区では現代の遺構や、自然流路跡や自然地形と考えられる現代より古い落ち込みが検出しましたが、長者ヶ原廃寺跡に関連する遺構は検出しませんでした。SB03礎石建物跡（南門跡）北側の再調査では、長者ヶ原廃寺跡に関わる遺構は検出しませんでした。SB01礎石建物跡（本堂跡）基壇北辺の再調査では本堂基壇の北辺を検出しました。基壇北辺と礎石列の距離は1.75m以上と考えられます。



長者ヶ原廃寺跡第21次調査区位置図 (NO SCALE)



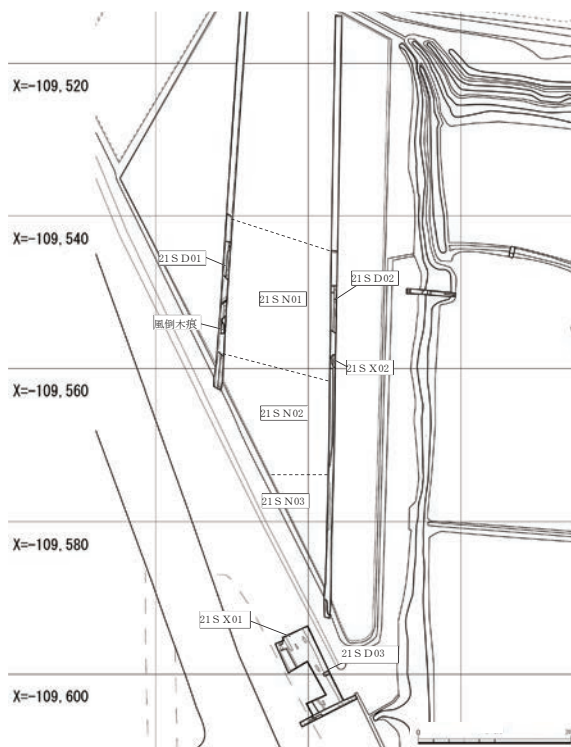
トレンチ3空撮 (直上から)



トレンチ5空撮 (直上から)



トレンチ4築地塀断面 (南西から)



第21次調査遺構配置図



21SD01出土の土師器 (南東から)

猪狩家資料の調査

岩谷堂猪狩家資料は、近世の仙台藩士猪狩家に伝わった家伝文書を中核とする資料群です。猪狩家は、岩谷堂伊達家に預けられた「御預給主」と呼ばれる身分で、仙台藩士でありながら、岩谷堂伊達家に預けられ、その支配下に位置付けられていました。近代にも、衆議院議員・岩谷堂町長などを歴任した猪狩八郎を輩出するなど、地域で重要な役割を果たしています。

同資料群は旧蔵者から奥州市に寄贈され、現在は市の所蔵となっています。令和2年（2020）に概要調査が行われた際には、合計して約5,600点の資料が存在することが判明

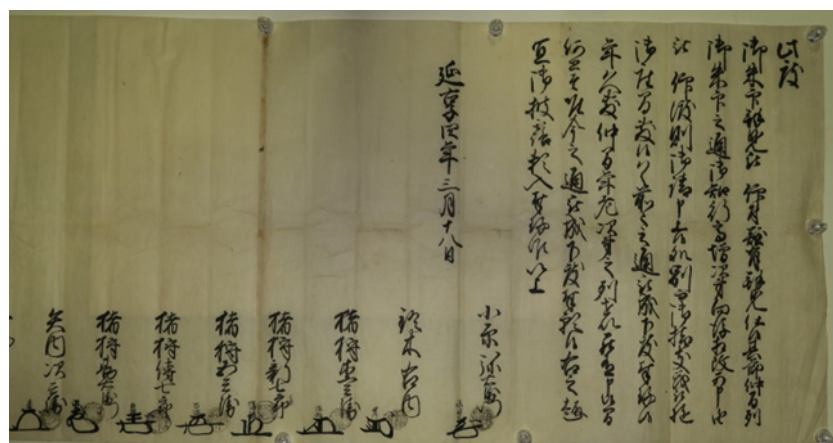
しています。年代は近世から近代に亘っており、種類も岩谷堂の給主仲間に関する文書から、近代の江刺郡内の町村に関係する公文書まで、多様な資料が含まれています。

なお、概要調査の際に、この資料群の中に同じく岩谷堂伊達家の「御預給主」であった三瓶家の江戸時代の文書も混在していることが判明しています。混在した時期は戦後で、三瓶家の子孫から猪狩家に資料の一部が渡されたようです。三瓶家の手許に残った資料も別途市に寄贈されているので、三瓶家に残っていた資料は全てが市の所蔵となったとみられます。

岩谷堂猪狩家資料の調査は、令和5年から福井大学の藤方博之准教授を中心とした研究者グループにより開始されました。調査は、各資料に付番した後、写真撮影、目録化の手順で進められています。現在は、えさし郷土文化館で管理している資料の調査を行い、令和5年度には2回現地での撮影作業が行われました。



調査風景（2023年）



延享4年（1747）3月18日付小原弥右衛門等連署請文

調査の枠組み

科学研究費助成事業

基盤研究（C）23K00807「地方知行制下の藩領における在郷武士と相給村落に関する研究」（研究代表：福井大学 藤方博之准教授）

佐伯家資料の調査

佐伯家は、近世に人首要害を拝領した沼辺家の家臣で、家老などの要職を務めたほか、江戸時代後期の当主徳成（山三郎）が私塾として「英雄堂」を開くなど、家中での有力な家でした。近代には、米里村長を務めた佐伯信や、その弟で詩人・内務官僚として活動した佐伯郁郎を輩出しています。

佐伯家では「人首文庫」の名称で土蔵を公開し、その中で佐伯郁郎に関する資料を展示していました。一方で、郁郎に関する資料以外にも佐伯家に資料が所蔵されていることが知られていましたが、その全容は明らかになっていませんでした。そのため、令和3年度（2021）に佐伯家全体を対象とした概要調査が行われ、佐伯家全体で24,000点以上の資料が存在することが判明しました。新しく把握された資料は、江戸時代の文書や佐伯信の日記、信宛の書簡などで、米里地区に関する資料になります。

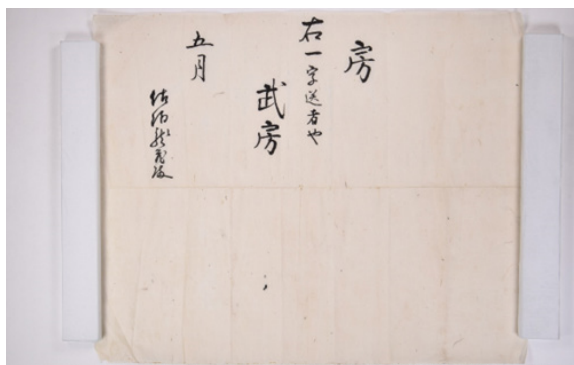
このように、佐伯家資料は市内でも有数の資料数を誇ることから、調査に関しては長期的な計画が必要になります。しかし、佐伯家の資料が地域にとって貴重な情報を含む資料であることに変わりはなく、地域などへの情報共有の手法について、改めて検討する必要性がありました。

そこで、金沢大学の高田良宏准教授を中心とするグループと奥州市教育委員会とえさし郷土文化館は、実験的な方法論として、情報学の分野で提起されている「逐次公開」の手法と、アーカイブズ学で用いられる理論を組み合わせるという方法での公開を試みました。この方法では、従前の悉皆的な概要調査に基づいて、分野・年代などが含まれる保管単位を特定し、その部分の整理を行います。事前に概要調査は完了していますので、整理作業を行った部分と未整理の部分を明確に分けることが可能となり、以降の調査との接続も容易となります。

今回の調査・整理では、佐伯家資料のうち、江戸時代の資料が含まれている保管単位を特定し、492点の目録化とデジタル化を行いました。資料は主に佐伯家に関する文書類でしたが、一部沼辺家に関する文書も含まれていました。これらの文書については、現在デジタルアーカイブとして公開されています。



調査風景（2021年）



（幕末）沼辺武房名字一字書出

○公開先：AMANE Archives「米里アーカイブ」 <https://ourarchives.amane-project.jp/yonesato>

調査の枠組み

（概要調査）

国立歴史民俗博物館総合資料学奨励研究「近現代地域歴史資料継承のための情報公開手法の検討」（研究代表：慶応義塾大学 福島幸宏准教授）

（目録作成・デジタル化）

科学研究費助成事業

基盤研究（B）20H01382「研究室データの早期公開を加速する「逐次公開」型運用モデルの確立と複数分野での実証」（研究代表：金沢大学 高田良宏准教授）



奥州市内の政治家資料の調査

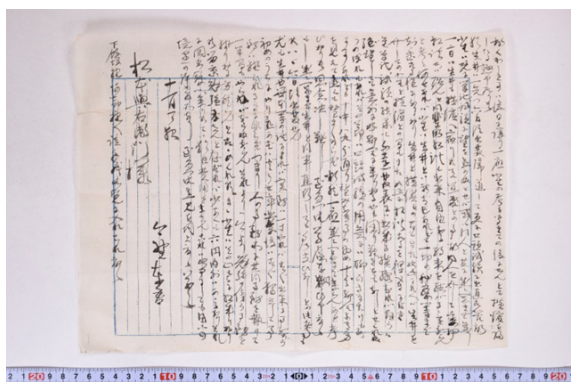
奥州市は後藤新平や斎藤實、小沢佐重喜、椎名悦三郎といった国家指導者となる有力政治家を、明治時代から平成時代まで途切れることなく輩出し続けた全国でも稀有な地域です。このような著名な政治家の資料も多く発見されていますが、より地域に密着した衆議院議員や市町村長、県会・市町村会議員の資料の発見も相次いでいます。

そのため、奥州市教育委員会ではこれらの資料の保全と調査を進めるため、国立歴史民俗博物館と合同会社 AMANE の支援を得て、東北大学の伏見岳人教授と共同で調査事業を実施しています。令和 5 年度は、下飯坂家文書のデジタル化と目録化を中心に行い、近隣地域も含めて政治家資料の所在確認調査を行いました。また、普及事業として、令和 5 年 8 月 27 日に「地域資料から読み解く胆江近代史」を開催しました。

下飯坂家文書は、明治時代から大正時代にかけて衆議院議員・水沢町長を務めた下飯坂権三郎宛の書簡を主体とする資料群です。概要調査は、令和 4 年度（2022）に完了しており、全体で 4,200 点あまりの資料が含まれていることが分かっています。そのうち、特に破損が激しい部分については、先行して教育委員会でデジタル化を行っています。

令和 5 年度は、約 2,000 点の封書について、目録作成用にデジタル化を行い、封筒の表面と裏面を撮影しました。今後は、このデータを基に封書の中身のデジタル化の優先順位を決定し、デジタル化を進めていきます。

この他にも、市内では明治時代に田原村長を務めた早川権五郎の資料の調査と、市に新たに寄贈された、昭和時代から平成時代に江刺市議を務めた菊池長兵衛の資料の概要調査を行いました。この他にも、市で受贈した資料群の中に政治家資料が含まれているものがありますので、今後も調査を進めていきます。



明治 28 年（1895）11 月 1 日付
松本与右衛門宛今野東吾書簡（下飯坂家文書）



菊池長兵衛家資料の概要調査

調査の枠組み

国立歴史民俗博物館日本歴史文化知奨励研究「岩手県内の近現代政治史資料のデジタルデータ化と地域社会連携の広域展開」（研究代表者：東北大学大学院伏見岳人）

下飯坂家文書の調査・研究（令和 5 年度実施） 合同会社 AMANE と奥州市教育委員会の共同研究

科学研究費助成事業

基盤研究（B）20H01382「研究室データの早期公開を加速する「逐次公開」型運用モデルの確立と複数分野での実証」（研究代表：金沢大学 高田良宏准教授）

奥州市における民具資料の保存・記録・活用状況についての調査

日々の暮らしの中で使用した道具類や、生業などで使用した道具類のことを総称して民具と呼びます。民具には地域性が強く反映され、気候や風土、文化の違いが顕著に表れます。しかし、高度経済成長期以降に生活様式が大きく変化したことにより、それまで使用されていた民具は、その多くが時代に合わず廃棄され、消失の危機を迎えました。その影響で、全国的に民具保存に対する関心が高まり、民具が資料として扱われて収集・保存されることになります。



調査風景（稲瀬郷土資料室）

奥州市内でも、高度経済成長期以降に、民具が収集された地域があります。このような民具の収集活動に関して、収集時点での動機やコレクションポリシーなどについて総合的に調査されたことがなく、不明なままとなっていました。

そこで、国立歴史民俗博物館と奥州市教育委員会、えさし郷土文化館が協力して市内で民具を収集・管理している地区をピックアップし、収集経緯などの聞き取り調査を行いました。聞き取り調査の対象地区は、江刺地域の梁川地区（梁川文化財収蔵庫）・稲瀬地区（稲瀬郷土資料室）、胆沢地域の小山地区（民俗資料館くらしの館）、衣川地域の北股地区（北股地区センターふるさと歴史資料館）の4か所です。

聞き取り調査により、各地区ともに収集に地域住民が主体的に参加していることが判明しました。収集年代は1960年代～2000年代で、地域によってばらつきがありましたが、地域で使用されていた民具が広く収集されていました。これらの民具収集活動は、市町村での博物館施設の設置よりも先行している地域もあり、地域住民が自身の生まれ育った地域の変化を目の当たりにし、積極的にこれらの資料を地域の記録として伝えていこうとしていたことが読み取れます。

今回は民具の収集をテーマとして聞き取り調査を行いました。このような地域住民による地域のアーカイブ活動やその経緯については、その事例が十分に把握されておらず、奥州市内では研究が進んでいない部分です。今回の調査により、その一部でも調査が進んだことは、貴重な成果と言えます。

調査の枠組み

科学研究費助成事業

基盤研究（C）21K01073「地域民具コレクションの整理手順のモデル化と緩やかな保存についての実践的研究」（研究代表：国立歴史民俗博物館 川邊咲子特任助教）

梁川伊達家文書・日高小路須田家文書の調査

奥州市教育委員会では、合同会社 AMANE・国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センターと「産学官連携に基づいた地域資料継承支援事業に関する覚書」を交わし、共同で資料調査事業や普及啓発のイベントを開催しています。

令和5年度は、①^{やながわ だて}梁川伊達家文書のデジタルアーカイブ化、②^{ひだか こうじ すだ}日高小路須田家文書の目録化、③^{しもいざか}下飯坂家文書の目録化及びデジタル化を行いました。このパネルでは、①と②についてその成果を紹介します。

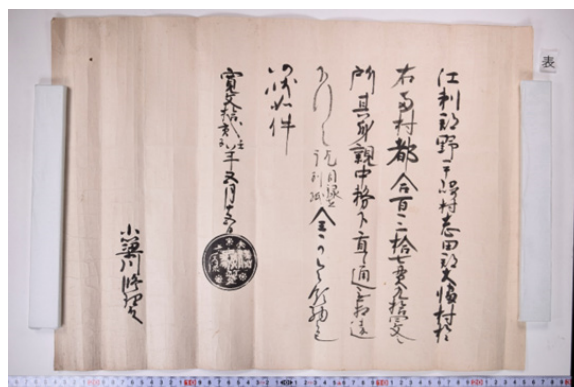
○ 梁川伊達家文書

近世仙台藩士の梁川伊達家は、伊達家の庶流で、中世から江戸時代には「小梁川」^{こやながわ}の名字を名乗っていました。江戸時代には、仙台藩の重臣として「野手崎所」^{のてさきところ}（現在の江刺梁川地区所在）を与えられ、藩の奉行（他藩の家老職に相当）を何度か務めています。明治時代には、「伊達」の名字を名乗り、梁川村長を輩出するなど、近現代においても地域の中心となる家でした。市教育委員会では、資料群の名称を付す際には現在の名前・地名等を使用することとしていますので、この資料群を梁川伊達家文書と名付けて整理しています。

梁川伊達家文書は、中世から昭和時代までの文書・古典籍が含まれていますが、数量が多いのは幕末から戦前までの文書です。目録には、914件の資料が登録されていますが、過去の調査の際に使用された封筒等も含まれており、原資料の点数は若干少なくなります。このうち、デジタルアーカイブ化のため、令和5年度に江戸時代の文書を中心に写真撮影を行いました。撮影が完了したのは417件で、準備が整い次第、順次デジタルアーカイブで公開します。

○ 日高小路須田家文書

日高小路須田家は、近世仙台藩士の水沢伊達家に仕えた武家です。資料群には、江戸時代から昭和時代までの文書が含まれており、最も古いのは寛永8年（1631）の文書でした。目録の資料件数は584件です。内容としては、江戸時代の文書・典籍と近代の文書・書籍に大別され、江戸時代の文書には知行地や水沢伊達家に関する文書など、近代の文書には土地関係の文書などが含まれていることが分かりました。



寛文12年（1672）5月15日付
小梁川修理宛伊達綱村知行状（梁川伊達家文書）



発見時の日高小路須田家文書

調査の枠組み

○梁川伊達家文書 （目録作成）梁川伊達家文書の調査・研究（令和2年度実施） 合同会社 AMANE 受託研究（奥州市教育委員会予算）
（デジタル化）梁川伊達家文書の調査・研究（令和5年度実施） 合同会社 AMANE と奥州市教育委員会の共同研究

○日高小路須田家文書 （目録作成）日高小路須田家文書の調査研究（令和5年度実施） 合同会社 AMANE と奥州市教育委員会の共同研究

北股地区センターから見つかった蕨手刀

2023 年、民具調査のために訪れた北股地区センターで、蕨手刀を発見しました。

蕨手刀とは、柄頭の先端が蕨の若芽のように湾曲し、柄と刀身が一体で作られている鉄製の刀のことを言います。その名称は、幕末から明治にかけての北方探検家で、好古家の松浦武四郎が、明治 15 年（1882）に刊行した図録『撥雲余興』第 2 集にて、東大寺に納められている「黒作横刀」を「南都東大寺黒装蕨手刀」と記載したのが初出とされています。

蕨手刀の出土例は九州、四国、本州、北海道で確認されており、なかでも東北地方北部に集中していることから「エミシの刀」と言われてきました。

発見された蕨手刀は『衣川村史Ⅱ 資料編 1（初版昭和 62 年、平成 8 年第二版）』に記載されている 2 本の蕨手刀のうち、懷徳館に保管されていた 1 本と考えられます。ただし、出土した場所に関する記述はなく、蕨手刀が奈良時代の墓から出土する例が多いことから、「村内に奈良時代を中心とする古墳のあった可能性が高い」とだけ記されています。

岩手県内では 81 点が出土しており、奥州市では記録上 9 点の出土例が報告されていますが、現時点で実物を確認できているのは、北股地区センターで再発見された 1 点のみです。出土場所の詳細が不明ではありますが、実態がわからなかった「奥州市の蕨手刀」について実物資料を得ることができた調査となりました。

市内から出土したと記録がある蕨手刀

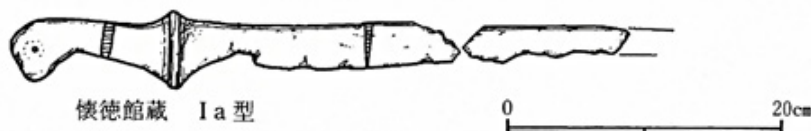
黒済和彦氏による集成（黒済和彦 2018「蕨手刀の考古学」同成社）より

場所		備考
水沢	日高西（小石森塚）	日高神社の西側。先代宮司さんの話では、現在電力施設がある辺りに塚があったそう。
	真城雷神	具体的な場所は不明。
	佐倉河	具体的な場所は不明。
江刺	？	具体的な場所は不明。
胆沢	若柳（上若柳）	岩手県史第 1 巻に「胆沢郡胆沢村若柳大字上若柳開拓地出土 古墳？ 昭和 10 年代発見」と記載がある。
	角塚古墳	2 本出土したと記載あり。このうち 1 本は、松浦武四郎記念館（三重県松阪市）が所蔵。残りの 1 本については、詳細不明。
衣川	馬懸	衣川村史Ⅱに「大正初年に鉄製の太刀とともに、衣川の古墳より掘り出せしもの」（『刀剣と歴史』第 64 号 大正 5 年）とある。
	？	懷徳館に保管されていて、令和 5 年に北股地区センターで再発見されたもの。



今回見つかった蕨手刀

全長：44.5cm（村史には全長 44.8cm と記載）
刃長：32.0cm 柄の長さ：11.5cm



衣川村史Ⅱに掲載されている当該蕨手刀の図と写真

参考文献

- 水沢市 1985 年『水沢市史 4 近代（1）』
- 江刺市 1987 年『江刺市史 第三巻 通史編 近代・現代』
- 衣川村 1987 年『衣川村史Ⅱ 資料編 1』
- 高橋信雄 1995 年「東北の鉄文化 蔵手刀」『まてりあ』34（10）日本金属学会
- 松本博明 2000 年「岩手の「郷土」教育 序説－『岩手教育』にみる「郷土」教育の変遷」（『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第 2 号』）
- 独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研修所 2003 年「第 1 部 日本の教育史の概観」（『日本の教育経験－途上国の教育開発を考える－』）
- 林潤平 2003 年「学校のモノの歴史に関する近年の研究動向－その研究の可能性と課題に関する考察－」（『近畿大学教育論叢 第 35 巻第 1 号』）
- 西川明彦 2011 年「正倉院宝物関連資料紹介 東京国立博物館所蔵金工・刀剣模造品」
（『正倉院紀要 = Bulletin of Office of the Shosoin Treasure House / 宮内庁正倉院事務所 編』33）奈良：宮内庁正倉院事務所
- 内山大介 2012 年「昭和戦前期の師範学校郷土室と博物館活動－地域博物館前史としての基礎的考察－」（『博物館学雑誌』第 37 巻第 2 号）全日本博物館学会
- 和崎光太郎・小山元孝・富岡勝 2017 年「学校史資料論の構築に向けて－活用と分類・学校統廃合・アーカイブズ－」（『近畿大学教育論叢 第 28 巻第 2 号』）
- 黒沢和彦 2018 年「蔵手刀の考古学」（『ものが語る歴史』39）同成社
- 村野正景・和崎光太郎編 2019 年『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック』
- 高知県の学校資料を考える会編 2020 年『シンポジウム高知県の学校資料を考える記録集』
- 太田佳光 2021 年「学校文化成立の歴史社会学的研究」（『愛媛大学教育学部紀要 第 68 巻 49-54』）
- 高知県の学校資料を考える会 2021 年『学校資料を残す・伝える－小中学校・高校に残る地域資料の世界－』
- 目良裕昭 2022 年「学校資料を残すためにできること－自治体・学校・地域の役割－」（令和 4 年度公文書管理に関する市町村等職員研修会）高知県の学校資料を考える会
- 山崎憲治 2022 年「戦時体制確立期に尋常小学校で編纂された教育資料にみる防災と人権－田老村津波誌と田老村郷土教育資料が語るもの－」（『災害文化研究』第 6 号）
岩手大学地域防災センター
- アジア歴史資料センター「日本の学校制度」 <https://www.jacar.go.jp/seikatsu-bunka/p03.html>
- 文部科学省「学制百年史」 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm

奥州市文化財調査速報展 2024 地域をうつす学校資料

主催 奥州市教育委員会
えさし郷土文化館
奥州市牛の博物館
一般財団法人奥州市文化振興財団
奥州市埋蔵文化財調査センター

2024 年 7 月 13 日発行
奥州市教育委員会事務局歴史遺産課
〒023-1192 奥州市江刺大通り 1-8
TEL 0197（34）1315
FAX 0197（35）7551
E-Mail rekishi@city.oshu.iwate.jp



神楽面
(伝 安倍保奈の面)
安政年間 (1854 ~ 59)
旧黒石小学校

奥州市教育委員会事務局歴史遺産課

えさし郷土文化館

奥州市牛の博物館

一般財団法人奥州市文化振興財団

奥州市埋蔵文化財調査センター